

今日の授業 震災の風化対策

東日本大震災と東京電力福島第1原発事故の発生から3月11日で15年が経過します。心配されるのが、風化です。長い年月が流れ、人々が震災の記憶を忘れてしまうことです。われわれは数多くの悲しい出来事を経験し、同じような目に遭わないようさまざまな学びを得ました。福島国際研究教育機構(FIREI、エフレイ)は、記憶を次の世代に伝える取り組みを進めています。

第5分野(原子力災害に関するデータや知見の集積・発信) 分野長

いまむら ふみひこ
今村 文彦先生



過去の経験から得られた学び、将来の行動に

役立つ教えを教訓と言います。その教訓を生かし、地域づくりに生かすのが本分野研究の目的です。主に二つをテーマにしています。

一つ目は震災を経験した人が、その後の人生をどのように過ごし、15年前の災害をどのように考



教訓を地域づくりに



事故を起こした東京電力福島第1原発

えているのかをまとめます。アンケートや聞き取りを通じて住民の心の動きを集めます。大規模な災害、原子力災害が県民に与えた影響の甚大さを明らかにします。インターネットで公開する予定ですが、個人情報扱いの方を考えると作って対応しよう

山梨県甲斐市生まれ。東北工学部卒、同大学院工学研究科博士後期課程修了。同大の大学院教授、災害科学国際研究所長を経て、東北大副学長。64歳。思い出ます。大震災と原発事故の記憶がない世代が、防災を学ぶために貴重な資料となるでしょう。

二つ目は、15年間にわたり放射性物質がどう動き、変化したのかを把握しています。放射性物質は時間とともに、放射線を出す能力が下がっていきます。放射性物質が15年前からどこに移り、どの程度残っているのかを、地図に落とし込んで見える化します。生活を始めた農地を再開したりする際、農地の安全性を判断するのに役立つはず。残念ながら、日本では大きな災害が繰り返されています。再び発生した際の備えになるよう、研究の成果を地域に反映させていきます。

山梨県甲斐市生まれ。東北工学部卒、同大学院工学研究科博士後期課程修了。同大の大学院教授、災害科学国際研究所長を経て、東北大副学長。64歳。思い出ます。大震災と原発事故の記憶がない世代が、防災を学ぶために貴重な資料となるでしょう。二つ目は、15年間にわたり放射性物質がどう動き、変化したのかを把握しています。放射性物質は時間とともに、放射線を出す能力が下がっていきます。放射性物質が15年前からどこに移り、どの程度残っているのかを、地図に落とし込んで見える化します。生活を始めた農地を再開したりする際、農地の安全性を判断するのに役立つはず。残念ながら、日本では大きな災害が繰り返されています。再び発生した際の備えになるよう、研究の成果を地域に反映させていきます。